

# インドスタディツアー-2017夏レポート



## もくじ

- 1) はじめに / フリー・ザ・チルドレン・ジャパンとは
- 2) 旅のスケジュールとルート
- 3) 参加者紹介
- 4) デリー、タージマハル、ジャイプール観光について
- 5) 寝台列車について
- 6) 支援先の村について①保育所及び妊産婦・幼児保健センター、小学校
- 7) 支援先の村について②水汲み体験
- 8) 支援先の村について③村人お宅訪問
- 9) 支援先の村について④ボランティアワーク（キッチン土台工事）
- 10) リーダーシップトレーニング・ワークショップについて
- 11) インドの文化について（カースト、料理、絞り染め体験など）



# インド

## スタディツアー- 2017 年 夏



### はじめに



インドは経済発展が目覚ましい国として、世界から注目を集めていますが、過酷な環境で働く子ども「児童労働者」がアジアで一番多くいると言われていいます。インドの子どもが貧困や搾取から解放され、子どもの権利が守られるよう、フリーザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ) では 2000 年から西ベンガル州で活動をスタートさせ、その後ラジャスタン州でも支援活動を行っています。

今回のインド・スタディツアーでは、支援先の一つであるラジャスタン州の貧困農村貧困を訪問し、支援先の人々の暮らしや文化を学び、交流を通して、実際に求められているボランティアワークを行ったり、私たちにできることを考えました。

今回のツアーは、2017 年 8 月 7 日～8 月 13 日の日程で実施され、中学生 1 人、高校生 6 人、大学生 1 人、社会人 2 人の合計 10 人が参加者として集まりました。いつも男性参加者が少ない状況でツアーを実施していましたが、初めて 10 人中 7 人が男性でした。

東京、群馬、埼玉、栃木、愛知、大阪の地域からの参加となり、年齢も住んでいる地域も違う者同士でインドで様々なことを学び、考え、共有できるその空間に参加できたことは、大変有意義で深い学びがありました。

また、カナダやイギリスの若者たちも夏休みを利用して WE(フリーザ・チルドレン)のツアーでインドにやってきました。世界の若者と支援先の地域で出会う、国を超えてインドや世界の問題をともに考える機会に立ち会えたことは感動的でした。

この報告書には、10 名の皆さんが学んだこと、感じたこと、日本人たちに伝えたいメッセージが込められています。この報告書を読んで少しでもインドの魅力や課題について興味を持っていただけたら嬉しいです。

フリーザ・チルドレン・ジャパン  
代表 中島早苗

### フリーザ・チルドレン・ジャパンとは？



#### ■認定 NPO 法人フリーザ・チルドレン・ジャパンとは

フリーザ・チルドレン・ジャパンは、1995 年に当時 12 歳のカナダのクレイグ少年によって貧困や搾取から子どもを解放することを目的に設立された「Free The Children」を母体に 1999 年から日本で活動を始めた NPO です。開発途上国での国際協力活動と並行して、日本の子どもや若者が国内外の問題に取り組み、変化を起こす活動家になるようエンパワーしています。

#### ●使命

フリーザ・チルドレン・ジャパンは 2 つの「Free」の実現を目指します。

- ・国内外の貧困や差別から子どもを Free (解放) すること。
- ・「子どもには世界を変えられない」という考えから子どもを Free (解放) すること。

#### ●活動・事業

2 つのミッションの実現に向けて、以下の事業を展開しています。

##### [FreeTheChildren Project]

- ▶ 海外事業：5 つの柱でプログラムを展開し、子どもが教育を受け、家族が自立できるよう協力しています。
- ▶ 国内事業：子ども支援では貧困や虐待など困難な状況におかれた子どものエンパワーメント活動に取り組んでおり、緊急・復興支援では大規模災害で被災した子供、地域に対して緊急・復興協力活動に取り組んでいます。

##### [We Movement]

- ▶ WE school：社会問題の「自分ゴト化」に向けた様々な形の教育プログラムの開発・実施
- ▶ WE Trips：フィリピン・インド・ケニアへのスタディツアーを実施
- ▶ Take Action Camp：「今を担うリーダー」として知識とスキルを磨くワークキャンプを日本とカナダで実施

# スケジュール



日程	スケジュール
1	8/7(月) 成田空港集合→インド・テリ-空港着→ホテルへ
2	8/8(火) アグラへ移動しタージマハル、アグラ城見学後、ジャイプールへ移動し寝台列車でウダイプールへ
3	8/9(水) ラジャスタン州ウダイプール駅到着、観光、宿泊施設へ移動後、ヘナ体験ワークショップ、散策(ナマズ寺訪問)
4	8/10(木) ヨガレッスン、ヒンディー語レッスン、支援先の村訪問・交流、リーダーシップトレーニングアクティビティ、カナダのユ-ス参加者との交流、インドのカ-スト制度についてレクチャー
5	8/11(金) 支援先の村訪問・ボランティア、絞り染め・スタンプ(木版)染め体験ワークショップ、インド料理体験ワークショップ、リーダーシップトレーニングアクティビティ、スペシャルティナー
6	8/12(土) ヨガレッスン、ウダイプール空港→テリ-空港へ、テリ-空港→国際線で日本へ
7	8/13(日) 帰国(成田着)

インド共和国

ニューデリー

アグラ

ジャイプール

ウダイプール

■タージマハル

■ジャイプール駅

■ウダイプール寺院

■ウダイプール駅

■支援先の村①

■支援先の村②



## 梶原 拓朗 / かじわら たくろう (高校 2 年生)



### 参加したきっかけ

以前から国際協力に興味があり、ボランティア活動を海外でしてみたかったため。様々な団体のツアーがありましたが、Free The Children, 及び WE について知った時、理念に共感できて、ツアーに参加してみたかったから。また、経済発展が著しい新興国であるインドに、その反面、貧困などの問題も山積していると聞いていて純粋に行ってみたく、そして、そこでの現状を知る機会にして、今興味がある発展途上国の国際協力の方面に役立てたかったからです。

### スタディーツアーに参加して

今回インドスタディーツアーに参加させてもらって、本当に自分が変わったと思います。日本にいた頃は、学校に行き、授業を受け、勉強する。このことがどれだけ恵まれたことかだなんて知らず、ずっと不平不満ばかりこぼしていました。勉強のことだけではありません。自分の人生自体運が

ついてなかったと思っていて、生きることに意味を見出せていませんでした。しかし、今回インドといういわば日本とは正反対と言ってもいいくらい、全く違う環境に行き、考えが 180 度変わりました。まず、勉強ができて、学校に行け、毎日食べたいものが食べれる、それがいかに幸せて、運のいいことなのかを学びました。インドでは子供の物乞いや、学校があったとしても僕たちがいる日本よりもとても劣悪な環境下で、必死に勉強しています。そんな子達、あるいは苦しい生活を強いられている人達を知らずに贅沢を言っていた自分が本当に恥ずかしく、情けないです。今回のツアーで、今言ったように自分の恵まれている環境、そして現地で活動する中で、国際語である英語を使う楽しさと必要性、人と協力して何か困っている人のためになれることの喜びを改めて学びました。自分に生きる意味、という少し重くなってしまっていますが、色々気づかせてくれたインドの人々に絶対に恩返しができるよう、日々頑張りたいです。このスタディーツアーをただのゴールにするのではなく、国際支援などに興味を持つことができたスタートラインだと自覚し、興味を持ち続け、支援して行きたいです。

このツアーを素晴らしいものにしていただいた早苗さんはもちろん、ファシリテーター、ツアーの参加者一人一人に、そしてインドの素晴らしさを気づかせてくれたインドに感謝したいです。ありがとうございました。行く場所どこでも人の温かさを感じたので、また絶対にフィリピンに行きたいと思いました。今回の経験を通して直接現地に行ってみないと分からないことがたくさんあったので、自分の偏見とかをなくし、今後色々なことに挑戦していきたいなと思いました。このツアーに参加でき、たくさんの人々と出会えて毎日を楽しく過ごせました。ありがとうございました。

## 藪部 夢有人 / やぶべ むゆと (高校 2 年生)



### 参加したきっかけ

インドは、人口が中国に続いて 2 番目に多い国です。そのような人口の多い国では、人々はどのような生活をしているのか、また、インドに存在する多様な文化はどのようなものなのかを知りたくて、今回のスタディーツアーに参加しました。

### スタディーツアーに参加して

私がインドの空港に着いてまず驚いたことは、路上でたくさんの野良犬が生活していたことです。日本では犬はペットとして飼われていて、私の家庭もペットのチワワを一匹飼っています。犬好きの私にとって、路上でやせ細った野良犬の姿を見るのはとても辛かったです。さらに辛かったのは、交通量が非常に多いデリーで、足を怪我した野良犬を目撃したことです。私はバスに乗っていて助けることができませんでしたが、もし私が動物を助ける能力を持っていたら、迷わず助けていました。改めて、命の大切さを学びました。

日が経つに連れて、私はインドはとても興味深い国だと感じました。まず、私たち日本人は外国から来たので、道行くインド人からの注目を集めました。彼らは鋭い目つきで私たちを見つめていて、最初は怖く、物を盗まれるのではないかと警戒していました。しかし、私にとってそんな怖い第一印象のあるインド人ですが、話し合ってみると意外に優しく接してくれたり、さらには向こうから私たちに話しかけてきた日本が大好きなインド人もいました。インド人の、見た目と中身が矛盾しているところがとても興味深く、新たな発見でした。次に、インドの田舎の方では、少数民族が多数暮らしていました。その中には独自の文化を持つ民族もいて、今回私たちは Free The Children が支援している少数民族の家を訪問しました。家は頑丈なコンクリートでできていて、私が想像していた少数民族らしい家とは全く違っていました。その家には、いかにもインドらしいテザインの壺やカーベットが置いてあり、敷地内を歩くうちに、インドに来て初めて異文化と交流をした、と実感しました。少数民族の人々の姿を見て、これからもずっと彼らの独自の文化が存在し続けてほしいと感じました。



**参加したきっかけ**

私は中学一年生の時からフリーザチルドレンにお世話になっていて、その頃からインドのスタツアに興味は持っていたのですが、なかなか勇気が出ず、その結果フィリピンに行ったり、カナダに行ったりとインドに行く機会を毎回逃してしまっていました。ですが、そのおかげが発展途上に行く怖さが自分の中で段々と軽減していき、今年このインドスタツアに行こうと意を決すことができ、参加しました。

**スタディーツアーに参加して**

今まで私はフリーザチルドレンを通してたくさんの国へ行かせてもらいましたが、これほど「もう一回行きたい」「本当に良かった」と思う国はなかったのではないかなと思うほど、このインドスタディーツアーは私にとって最高の経験になりました。

ある家族のお家に訪問した時に、インタビューで家族の母が「自分はこの生活にとっても満足している。」と言っていたのをよく覚えています。その一家が生活している家は電気がなく、ドアもなく、ハエが飛び回り、日本では到底考えられない環境。こんな環境に満足していることが私にとっては衝撃で

あった反面、感動でもありました。この衝撃と感動が今回のスタツアで一番印象に残ったことです。日々不平不満やわがままばかり言っている自分は、常に過ごしやすい、自分が生きやすい環境を求めます。それを情けなく、悲しいことだと思ったことは初めてかもしれません。それは、今ある環境に満足し、感謝することを強く命じられたような感覚でした。インドは私に、自分は恵まれている環境で生きているのだと、そしてそれに満足しなければいけないのだとなんともなんとも言い聞かせてくれました。そんなことを教えてくれたインドに私はまた行きたいと毎日思います。他の国では感じなかった温かさや、あたかも私を見守ってくれているような安心感がインドにはありました。こんな感情を抱けるような場所を14歳にして見つけられたことを私はとても幸せなことだと思っています。こんなにもインドに親近感が湧いたからこそ、自分が親に負担をかけずに海外に行けるようになったらインドで住民の生活、子供の生活を豊かにするような活動をしたいです。



**参加したきっかけ**

僕がこのツアーに参加したきっかけはインドの方々が生世界的に活躍している人のことを最近よく聞きます。グーグル、AD OBE、などのCEOはインド人です。また、映画製作などは世界一と知りました。しかし、その裏にはインドのたくさんの問題があり、未だにその問題は根深く解決されません。世界的に進出できる人達がいる、また、その一方では人身売買や不衛生の病氣、カースト制度などに苦しめる人達がいるインドという国を自分自身でもっと知りたいと思いました。また先進国について途上国の人々はもっと寄り添い助けに行かなければいけないと思います。大きなことはできませんがまず知ることから始めたいとおもいます。

**スタディーツアーに参加して**

インドスタディーツアーで1番印象があるのは、やはり貧富の差が激しいと感じました。また、色々な世界遺産に触れインドという国は壮大で厳しいカースト制度の歴史を持った、また、そこを現在でも守り生きている人々に触れてもすごく考えさせられました。僕たちが行った民家や学校はインドでもとても小さな学校でしたが、子供達の笑顔はとても優しく、元気で僕は何ができるかと訪問をしに行きまして逆に僕が彼らにたくさんの事を学ばせてもらいました。しかし、やはりインドはまだ不衛生です。泥沼地区でも靴も履いて

いない子もたくさんいました。また、インドの問題の中の人身売買や女性差別僕たちが日本に帰り色々なことを考えて、また、一つでも問題がなくなればいいと感じました。基本的にインドの方々は僕たちを温かく迎えてくれました。ガイドツアーやインターネットではわからないこともたくさんあり、やはり、発展途上に僕たちは足を運び経験し、正しい情報を伝えてみんなで問題について考えるべきだと思います。美しい場所もたくさんあり、エネルギッシュなインドまた、新たに知識を得て訪れたいです。



**参加したきっかけ**

私がこのスタディーツアーに参加したきっかけは最初は大学のゼミの研究のためでした。もともと貧しい国に興味がありその人たちの暮らし方や文化などにざっくりと興味があり、そんなテーマで卒論をかけたらいいなと思っていました。そんなときにある1つの映画に出会いました。その映画はインドで小さな子どもが迷子になります。日本では普通子どもが1人で歩いていたら誰かが声をかけ助けてくれます。でもインドでは違いました。その子を誰も助けず何日も何日も1人でホームレスのように暮らさやと助けてくれた人が現れたと思ったら売られそうになり駅で寝ていたらどこかに連れていかれそうになる。そんな暮らしを小さな子が経験するのです。そして施設に入れられてオーストラリアの人にもられます。この話が実話と聞いたとき私は本当に悲しかった。どうしてこんなに違うのかインドに行って実際に自分の目で確かめに行きたいと思いました。そしてゼミの先生に相談し行くことができました。

**スタディーツアーに参加して**

インドに行ってみて自分が思っていたよりインドの人たちは楽しそうに暮らしていました。インドにも都会や田舎がありバイクが尋常じゃないくらい多くて4、5人乗っていたりヘルメットを被っていないのは当たり前。道路には牛。初めは驚きがいっぱいでしたがそれが普通になって行く自分がいてインドの魅力に引き込まれるばかりでした。そこら中に人がいてみんな主張が激しくインドの国柄を身に染みて感じました。でも子どもたちはみんな手を振ってくれる暖かい町だなと、私にとってすごく魅力的な国だと思いました。都会ではやはり貧富の差が起きて路上に住んでいる家族や子どももいて悲しかったです。でもインドは成長しているとガイドさんも言っていたのでこれからもっと生活しやすい国になったらいいなと心から思うし私にも何かできることがあったら関わって行きたいと思いました。他にも村の人のお宅に訪問したり学校に行って子どもたちと遊んだりボランティアをしたりたくさん経験できました。でももっと一緒に生活してこの人たちの暮らしを知りたいと思いました。なにより辛かったことは言葉が通じないこと。そんなことわかった上で行ったのに思っていたよりもはるかに辛くて大変で、本当に会話ができないことが辛かったです。そんな中でも変わらないのが子どもたちの笑顔で。子どもは世界中どこに行っても元気に笑っていてこちらが笑顔ももらいました。インドで生活する中でもっとこの人々と生活を共にしたい、もっとここにいたいと思えたことが何よりもよかったです。またヒンディー語や英語を必死に勉強してインド戻りたいです。



杉田 康輔 / すぎたこうすけ (高校2年生)



### 参加したきっかけ

もともと社会問題やボランティアに興味があって、個人的にインドに行ってみたかったから参加しました。また、ポスターを見たときに学校建設の手伝いと書いてあったのでそれにひかれて参加を決めました。でも、インドに行くということで少し不安もあって出発の前日までずっと不安や心配でいっぱいでしたが、インドに行ってみるとすごく優しい人ばかりで行く前の不安や心配は嘘のように忘れ最終日には日本に帰りたくないという気持ちになるほどでした。

### スタディーツアーに参加して

今回のスタディーツアーではインドのたくさんの文化にふれ、普段できないような貴重な体験をたくさんしました。特に印象に残ったのが、村の学校を訪問して子供たちと交流したことです。最初は、言葉の通じない中でどうコミュニケーションを取ろうか心配だったのですが竹トンボや紙風船などの日本のおもちゃを渡すとみんなが私の周りに寄ってきて子供たちみんなが笑顔になって私たちも自然と笑顔になりました。今回のスタディーツアーでたくさんのことを学んだので吸収するだけでなく、今回学んだことを生かして何か社会問題に対する行動を起こしたいです。プロフィールの写真の笑っている子供のように世界中の子供たちが笑っていられるような世界にしたいと思いました。また、インドで見えた光景を忘れずに困っている人たちのために何かできることを考えたいです。

然と笑顔になりました。今回のスタディーツアーでたくさんのことを学んだので吸収するだけでなく、今回学んだことを生かして何か社会問題に対する行動を起こしたいです。プロフィールの写真の笑っている子供のように世界中の子供たちが笑っていられるような世界にしたいと思いました。また、インドで見えた光景を忘れずに困っている人たちのために何かできることを考えたいです。

梅村 光 / うめむらひかる (社会人 / 愛知県立名古屋盲学校教諭)



### 参加したきっかけ

以前、NHKの『視覚障害ナビラジオ』にわたしの同窓生であるF T C Jのスタッフの方が出演されていて、この団体を知った。そして、この団体のフィリピン障害者支援事業に寄付した。ホームページで今回のスタジアのこのことを見て参加を検討していた時、このツアーのパンフレットを送っていただき、参加を決めた。

### スタディーツアーに参加して

今回のツアーはわたしにとって初めての海外経験となり、全てが新しい体験であった。日本とは違うインドの文化にもたくさん触れることが出来た。マイクロバスでの移動では、他の車やバイクとすれ違う度に日本より遥かに多くクラクションが聞こえ、急ブレーキも多かったように思う。タージマールやアグラ城では、石垣に彫られたさまざまな形など触れるものが多く、見えなくても楽しめるものであった。食事でもインドのカレーは辛いと聞かされていたが、実際に食べてみるとそれほど辛くなく、カレー以外の料理もあり飽きることはなかった。皿やコップなどの食器がステンレスできていたのも、珍しい経験となった。コミュニティー訪問では家の屋上

(2階)の部分に新しく部屋を作るなど、現地の人の生活の様子が分かった。水くみ体験では水が3分の1くらい入った甕を頭に乗せて数歩歩いてみたが、乗せた瞬間バランスが取れず全くと言っていいほど歩けなかった。現地の人は水がたくさん入った甕を3つも重ねて頭に乗せて運ぶと聞いたが、今のわたしには到底無理だと感じた。コミュニティーの学校訪問では、トイレが建設されたことで特に女子の就学率が向上したと学んだ。日本では公共施設にトイレがあるのは当たり前で、トイレと就学率との関係については今まで考えたことがなかった。ただ、今回この話を聞いて、トイレの重要性に改めて気づいた。

併せて、現地では白杖を持っていたことで、たくさん声をかけてもらった。タージマールやアグラ城、空港などではよく声をかけられたし、車椅子やエレベーターの利用を勧められた。帰りの空港での保安検査も、丁寧な対応であった。ジャイプールのマクドナルドで封筒に穴が開いていたことに気づかずお金を床に落としてしまった時には、他のお客さんが拾ってくれた。白杖が視覚障害者を表すことが海外でも認知されていると分かり、うれしいと同時に驚いた。

そして、もう1つわたしにとって大きな経験は、初めて外国で英語を使ったことである。例えば、行きの機内で飲み物が回ってきた時、何があるかが分からないので "Please read the menu for me." と言ったら、アテンダントさんが何があるかを英語で言ってくれた。メニューの全てを聞き取ることはできなかったが、わたしの言った英語が通じたことと実感でき、とてもうれしかった。英語とは関係ないが飛行機関連では、行きの機内で食事と一緒に出てきた水がペットボトルや缶、紙パックではなく、ゼリーやプリンが入っているような花片型の容器に入っていたのはびっくりした。最初、水だとは気付かなかった。また、コミュニティーに着いた時にバスを降りた所から建物まで案内してくれた子供と、「段がある」、「靴を脱いで」、「ここに座っていいよ」など少し英語で話した。他にも空港での入国審査や身体検査、マクドナルドでの注文など、不十分な所もたくさんあったが自分なりにできる範囲で英語でやり取りした。

バスの中やコテージでは他の参加者と交流する中で、修学旅行での体験など外国の様子をたくさん聞いた。そんな話を通して、外国が自分の中で今までより身近な存在となった。わたしは単独で海外に行くことは、特に言葉の面でまだ難しい。しかし今後、今回のツアーのような機会があれば、ぜひ他の国にも行ってみたいと思うようになった。今回のツアーは大変充実したもので、日本ではできない経験がたくさんでき、参加してよかったと感じるものとなった。



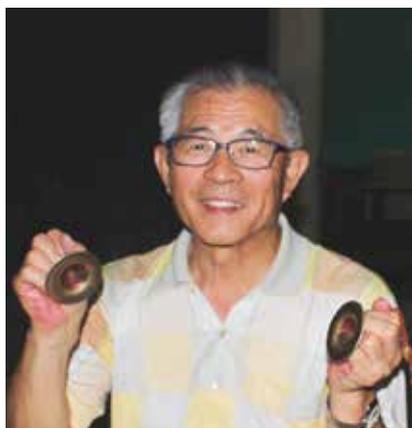
#### 参加したきっかけ

私がこのインドスタディーツアーに参加しようと思ったきっかけは、今年の5月に行われたFTCJが主催しているTake Action Campに参加したことです。私は社会が苦手なため、国際問題について詳しく知りませんでした。Take Action Campに参加し、様々なワークショップを行ったことで社会問題や国際問題について知り、興味を持ち始めました。たくさんの国際問題がある中、私は貧困についてもっと詳しく知りたいと思っていました。そこでこのインドスタディーツアーを見つけました。インドの暮らしや文化に触れながら現在のインドの貧困問題について学べるいい機会だと思ったので参加しました。

#### スタディーツアーに参加して

このツアーに参加して、私は多くのことを学ぶことができました。私は正直、初めは不安や心配事が多くあったのでインドに行くことに対して前向きではありませんでした。インドに行くのは初めてだったので普段通りに生活ができるか、衛生面や病気などの心配をしました。インドにいる間も不安になる事が多々ありましたが、インドについてあまり知らなかった私には

新しい発見ばかりでした。想像していたよりも全然楽しく、インドの文化や生活についてたくさんの事を知る事ができました。私は、学校で貧困や児童労働について学んできましたが、写真を見たり、話を聞いたりするだけでどれだけの人々が苦しんでいるのかわかりませんでした。実際に自分の目で見てやっと日本とインドの暮らしの差に気がつきました。インドの街にはあたりまえのように人が座っていたり、水牛が車道を歩いていたり、日本では見たことがないことがインドではあたりまえのようにあって驚きました。そしてそこに文化の違いを感じました。



#### 参加したきっかけ

私は初めてインドに行ったのは1981年で、なぜかこの国は100年たっても豊かにはならないのではないかと思いました。それから36年たって今回インドを見たいと思いました。なぜならインドは2004年ごろから経済が成長期に入ったと言われ、IT関係を中心に豊かになっていると報じられています。

インドの人口は約12億人で日本の10倍ですが、毎年1000万人増え続け2030年には中国を超すと言われています。2010年には中間層は2億4000万人になったと言われています。しかしながら国民一人当たりのGDPは\$6700で日本の約5分の一です。一日2ドル以下で暮らす貧しい人は30%だともいわれています。さすがにニューデリーの街は車でいっぱい騒音の中で渋滞が発生していましたが、都市と田舎の格差は大きく、我々が行った人口200人の村は別世界でした。日本から贈られた小学校は1年生から5年生まで一クラスで30人ぐらいの生徒が勉強しており、昨年学校にトイレを作ったら特に女子の生徒の登校率が上がったとのこと

でした。良く聞いてみると村のほとんどの家にはトイレが無いのだそうです。電気はありますが水道はありません。村の決められた川の水をカメに入れて頭の上で家まで運ばなくてはなりません。ほとんどの人の職業は農業ですが、耕運機などはありません。手で草を取って鋤で耕します。ちなみにインドの人たちの識字率は男性75%、女性50%だそうです。学校に行けない人が多いですね。我々はガタガタ道を小型バスで走りますが、道には旗を持って歩く小さな集団に出会います。これは巡礼の人たちです。ヒन्दウ教は多神教で理解は難しいのですが、歴史的にはイスラム教やキリスト教とうまく共存しているようです。村の人は我々にバスに手を振ってくれます。何とも素晴らしい笑顔の持ち主です。今世界一の民主主義の大国インドは、格差を生み出す資本主義を目指して前進し始めたことは事実の様ですが、今後も順調に発展してほしいと思いました。



#### 参加したきっかけ

自分は海外に行っているいろいろなものを見て感じてみたいと思っていた。その中で、このツアーのことを知った。インドは自分が行ったことがない場所で、ボランティアを通して現地の人とも交流ができるこのツアーに参加しようと決意し、参加した。

#### スタディーツアーに参加して

今回のツアーでは、学校にいけなかった成人の方や物乞いの人をたくさん見た。その中でこのような問題は改善しなければいけないと思った。しかし、日本を含めたくさんの国やチームが援助していても一部分だけでしか改善できないのではと考えた。そんな中、Meでは教育などを援助していた。自分もこのツアーを通して教育が大事なことに気づくことができた。そのため、このツアーに参加することができてとてもよかったと感じている。

## インドへ出発！

### デリー・タージマハル・ジャイプール観光

日本の成田空港を出発して9時間ほどで、インドのデリー空港に到着しました。

機内では、ほとんどの人がインドに帰ると思われる人たちがばかりで、また、機内食では早速カレーが出たので、今から本当に自分がインドに行くということが現実味を帯びてきて、楽しみなのと不安だった感情が入り混じっていたことを今でも鮮明に覚えています。

飛行機を降りて、入国手続きなどを済ますため、空港に1時間弱ほどいました。その時、インドの空港は日本と同じくらい、もしかしたらそれ以上にきれいにされていて、インドに勝手に抱いていたイメージとは全く違く、少し驚いたのもありましたが、安心しました。空港ではもちろん、インド人の方だらけで、ターバンのようなものを巻いている人も多く、日本だと目にすることはまずない光景もありましたが、スーツを着ている人だったり、英語で話し忙しそうにしている人たちを見てIT王国だったり、経済大国と言われるインドの所以が少しわかったような気がしました。

空港を出て、まず思ったのが湿気のすごさでした。気温はそこまで高くはなかったのですが、湿度が日本の夏とは比べ物にならないほど高く、まるでサウナの中にいるような感覚でした。迎えにきてもらうバスを待っている時に、空港の周りに野良犬が多くいて、これもまたインドならではの光景で、驚きました。

バスに乗り込み、ニューデリーの中心街へ向かいました。空港近辺は通行量もそこまで多くはなかったのですが、走り始めてから10分経ったか経たないくらいでインドの圧倒的な交通量に驚愕させられました。

クラクションの音が響き渡り、渋滞で本当に少しずつしか進めず、日本の高速道路などでの渋滞とは比べ物にはなりません。しかし、現地の人たちにはそれが日常で、別に怒るようなこともなく、僕たちの乗っているバスを見てインド人ではないとわかると、笑顔で手を振ってくれる人が多くいました。

しかしその反面、心に引っかかったのは、路上で暮らしている家族の姿でした。野良牛が道路を歩いているというテレビでしか見てこなかった景色にももちろん驚きはしましたが、それ以上に高速道路の高架下で暮らしている人たちが、ロータリーの狭い道路上で身を寄せ合って暮らしている家族、そういった光景が本当にショックで、自分のただ見ているだけで何もしてあげられない無力さが悔しかったです。

その後、無事ホテルまでつき、一泊して、翌朝、タージマハルとアグラ城があるアグラへ向かいました。

タージマハルは、教科書やテレビなどで見るように、本当に真っ白で、息を呑むような美しさでした。これが人のお墓だとは全く思いませんでした。運が良かったのか悪かったのか、あいにくの雲空で、おかげで人はあまり多くはなく、ゆっくりと見て回れました。中にも入ることができて、とても貴重な経験になりました。続いて、アグラ城に向かいました。日本ではあまり有名ではありませんが、アグラ城は大きな赤い城塞で、タージマハルを望むこともできるスポットです。ここで、タージマハルを作ったシャー・ジャーハーンが亡くなった妻を思い晩年を過ごしたそうです。

この2つの場所を回って、2つ考えさせられる経験をしました。まずは、アグラ城で、僕たち外国人が入場する際には何もなく入れたのに、インド人だったり中東系の顔つきをした人は厳重に入場検査みたいなものが設けられていたことです。この時、インドの歴史だったり民族間、特に宗教上の問題からテロなどを懸念して行っていたのかなと思い、何か感じるものがありました。

2つ目は、タージマハルから帰って来て、バスに乗り込もうとした時のことです。足を引きずり、ほとんど四つん這いのような格好で僕に食べ物求めて来た物乞いの方がいて、話には聞いていたものの、実際にそのような方に会うのはインドに到着してから初めてで、困惑するのと同時に、無視しなくてはならないことが本当に辛くて、胸が締め上げられるような思いをしました。このような人を本当に一人でも多く減らしていかなければならないと強く思いました。（報告者：梶原拓朗）



## 都市と農村の違いについて

インドに着いて私たちが一番に足をつけたのがデリーです。とても暑く、ムシムシしていて、皆暑い暑いと言っていたのを覚えています。

私たちは空港から次の目的地へ行くためにすぐバスに乗り込んだのですが、私はまず、バスの車窓から見えた車の多さにとてもびっくりしました。何車線あるのかも分からなくなって、左右前後でクラクションが鳴りとても賑やかで、日本では見られない光景に私は「インドに来た」という実感が少し湧きました。見慣れない数々のインド人に車窓から見つめられ、初めはどちらかといえば不安や怖さの方が大きかったです。

いざ市場街に出ると、自分が想像していた通りの活気溢れたお店がたくさん並んでいて、物を頭の上に乗せて運んでいる女性がいったり、道端で商品を売る人々がたくさんいて、まさに町が生きているといえるくらい晴れやかでした。それは夜になっても変わらず、お店の光はピカピカと光り、たくさんの方が賑わっていました。



一方で、夕食を食べに行く道中、貧しい家族や、栄養が足りていないような貧弱で細い子供たちに遭遇しました。教育を受けられずにそのまま仕事を手に付けることができず、12歳にして子供を産み、お店から出てくる人々にお金をねだる毎日を送る母子。一家の周りにはたくさんのお店があって、飲食店があって、インドでは裕福な地域であるにも関わらず、そこには貧しく毎日食べていくお金がない人がたくさんいると知ると、世の中は綺麗なことで成り立っているのではないのだと思いました。

2日目以降、私たちはウダイプールという地域で3日間過ごしました。ウダイプールはデリーとは打って変わって、とても静かで自然が豊かな場所でした。



デリーはいつも賑やかで活気あふれる街という印象でしたが、ウダイプールはどちらかといえば時間がゆっくり流れ、物静かで穏やかな印象でした。インドが初めてであった私は、ウダイプールの静けさがとても落ち着き、何時間か過ごすうちに親近感が湧いてきました。ウダイプールにて、私にはとても印象に残っている光景があります。

それは、私たちと同じくらいの年齢、15歳くらいの男女が制服を着て、みんな通学していた光景です。みんな美人で目鼻立ちがはっきりしていて、私はその可愛い子供たちに見入ったとともに、友達と笑いながら通学している姿を見て、心がほっこりしました。インドの子もみんな、なんだか自分たちと変わらないような気がするようで、なんとも表せない喜びがとても大きかったです。

また、教育を受けられない子がたくさんいると聞いていた私は、少なくとも私が見た男女が学校に通えているということがとても嬉しかったです。そして、このFICIが支援しているおかげで学校に通えているという人がウダイプールにはたくさんいて、支援することの偉大さに深々と気づき、これからもボランティア活動に力を入れていきたいと改めて念を押すことができました。（報告：山田麻心）

## ジャイプールからウダイプールへ寝台列車で移動！



インドの夜行列車、行程表を見た時からインドで一番注意することになるだろうと思いました。一応、南京錠と全身を覆えるバスタオルを持ちトイレにあまり行かずに水分調整などと共にして駅へ。駅はやはり人々が寝転び、数人の群団があちらこちらに座り日本の駅とは全く違う雰囲気でした。



しかしその駅もインドならではの力強さ、パワーも感じました。初めはあまりジロジロしないように行動していましたがインドの駅や線路、電車の全てが新鮮に見えあたりを見渡してしまいました。

それと街でも駅でも話してきてくれた言葉が「私たちは日本人が好きだ」としかし日本の隣国の人々のことはあまりよく言わず大声で訴えかけるように話している事に疑問とまたその国とインドの関係や日本の事を友好に感じてくれている事を日本に帰ったら学びたいとその時思いました。

日本では夜行列車は動くホテルのイメージがありますがインドはやはりインドの面積が広いため移動手段の一つであり外観や内装は豪華ではありませんでした。

しかし、駅に真夜中に入ってくる夜行列車はとてもカッコよく、つい写真やビデオに夢中になりました。中に入ってみるとその光景は綺麗でなく臭いも日本の列車とは違い逆に僕にとって見たら新鮮に感じ胸がワクワクした記憶があります。

カーテン越しのボックスの中にタンカのようなベットが4つありシーツは新しい真っ白なシーツが引いてありました。僕と友人の他にインドの人が二人いました。

頭は荷物管理、またあまりジロジロしないでおとなしく思っていました。その方々は僕たちに係員に毛布を二つ用意してくれと頼んでくれて「使いなさい！」と優しく毛布をくれました。全ての緊張が解けて英語で楽しくコミュニケーションをとり行程表をもらった時の自分の夜行列車への警戒心はあまり必要ない事を体験しました。

インドの方々の中には悪い方もいるかもしれませんが私が出会った方々は心温かく優しく接してくれました。しかし、二人のインドの方々で寝付いたらかなりのいびきがひどく一睡もできませんでした。一夜を過ごしたインドの方々から電車からおりて行く時とはとても寂しくのちの僕たちの旅を楽しむように話してくれたことは今でも目に浮かびます。とても掛け替えのない思い出でした。

(報告者：高柳 伊玖摩)

インドに行って初めて乗る電車。インドの駅や電車は人が多いイメージがあった。実際行って見て、電車の中は寝台列車ということもありあまり人は多くなかったが駅のホームにはたくさんの人であふれかえていた。

日本では電車を待つ時間はそんなに長くないし椅子があったりするから地べたに座って待つという光景をあまり見ないし、地面に座るとなんだか印象が悪いイメージを持ってしまった。

しかしインドではきっと電車が時間通りに来ず遅れてくるのは当たり前なのかホームにはたくさんの人がいた。そしてたくさんのインド人が地べたに座って電車が来るのを待っていた。



ちゃんとシートを敷いて座っている人もいたし円になりご飯を食べていてピクニック状態になっている人、寝転がって寝ている人もたくさんいてとても自由だと思った。いかに電車が来るのが遅いかに身に染みて感じた。待合室もあったがホーム近くのほうがたくさん人がいた。待合室にシャワーがあったのには驚いた。

私たちが乗る電車も1時間以上遅れて到着し、やっと寝台列車に乗ることが出来た。電車に乗りまず思ったことが狭い!!!狭すぎる!!!ベッド自体はそんなに狭くないが通路は一人通るのがやっとのスペースしかなかった。

二段ベッドになっていて通路側と向かい側に二台あった。漂う雰囲気はなんだか怖くて居心地が悪いと思い、絶対にこんなところで寝れないし寝ころびたくないと思ったのが最初のイメージだった。トイレも下に垂れ流すシステムでこんなに地面や風を感じながらトイレをするなんて思ってもおらず何とも言えない気持ちになった。

ホテルなどのベッドに違和感を感じたことはなかったのに寝台列車のベッドには正直気分が悪さしか感じなかった。

でもどうしても不思議なことにずっといたら楽しくなってきた。おかしくなったのか慣れてきたのかはわからない。でもなんだかとても楽しかった。

こんなベッドがたくさんある電車に初めて乗ったし逆に電車なのにベッドがありみんな普通に寝ていることが面白くて楽しいと思ったのかもしれない。

そして寝心地は抜群によかった。まだまだもっと寝たいといつも思う気持ちがここでも生まれていた。日本の夜行バスなんかとは比べ物にならないくらいぐっすり寝られたしこれは日本でも取り入れるべきだと思った。

(報告者：西岡 展葉)



私たちは、Free The Children が支援している村の保育所と小学校に訪問し、そこで教育を受けている子どもたちと交流しました。

保育所では、まず訪れた私たちを歓迎する儀式を行いました。村の代表（ヒンドゥー教司祭）が畑でとれたお米を、ヒンドゥー教や仏教で吉祥として用いられる印の形に整え、その上に私たちは水と赤い炭酸カルシウムの粉をかけ、黄色の花を添えました。

その後に、私たちは第三の目としてインド人の大半がつけている赤くて丸い印を、現地の方におでこの辺りにつけてもらいました。私は、普段の生活であまり宗教に関係する儀式などを行う機会がないので、インドで歓迎の際に行った儀式はとても新鮮でした。

また、私は仏教は世界共通と思っていましたが、同じ宗派であっても、日本に伝わった大乘仏教とインドの小乗仏教では信仰の目的などが異なるため、異なる信仰や儀式を行うということを初めて知りました。

今回の保育所の訪問で、仏教について知らなかった事を改めて学ぶことができ、また日本では体験できないインドの儀式を体験できてとても良い経験となりました。

保育所を訪れた後、私たちは現地の子どもたちが以前使っていた学校と現在使っている新しい学校を見に行きました。

まず、古い学校の中はとても狭く、壁はコンクリートの灰色一色で、黒板は縦横1メートルくらいの大きさで、勉強用の机や椅子はありませんでした。そして、天井には明かりもなく、一か所だけ設置されている窓はガラスがなくて、雨の日だと雨水が室内に入ってくる、と案内担当の人は言っていました。

一方、新しい学校の方は外の壁が青く、中はとても広くて、黒板も日本の学校のものと同様同じ大きさで、勉強用の机と椅子が設置されていました。私は、古い学校と新しい学校の設備の差が大きくてとても驚きました。机と椅子がない不便な環境で勉強していた生徒たちは、とても辛かったと思います。しかし、新しい校舎が建てられたことで、生徒たちは不満を持たずに勉強していることでしょう。

(報告者：菌部 夢有人)



私たちは村にある小学校にも行きました。小学校に行く前に、私たちはヒンディー語を学びました。基本的な単語や自己紹介の仕方を学びました。これは村の人々と少しでもコミュニケーションをとれるようにするために行いました。村の人々はヒンディー語しか話せないためコミュニケーションをとるのがとても難しかったです。私はヒンディー語が話せなくても小学校の子どもたちに受け入れてもらえるのかと心配していましたが、子どもたちや施設の方々は私たちを温かく迎えてくれました。小学校に通う生徒はみんな明るく、言葉が通じなくても仲良くなれるんだと安心しました。



私たちが小学校を訪問した時、小学校に通っていた生徒たちはFTCJが新しく建てた小学校で学んでいました。

そこにはきれいな黒板、椅子や机があり、壁には絵などが描かれていました。現在生徒は整った環境で勉強していましたが、FTCJが小学校を建て直す前はとても狭い部屋で勉強していました。

私たちは前に使っていた教室にも行きました。そこには小さな黒板しかありませんでした。明かりが入るようなしっかりした窓はなく、机や椅子もありませんでした。

とても狭い部屋に約30人の生徒が勉強していたと聞いて、整っていない環境で勉強していた生徒を尊敬してしまいました。明かりがなく、寒い部屋で勉強しても集中できないと思いました。

私たち日本人は学校で教育を受けることが普通だと思っていますが、世界にはまだ勉強する環境が整っていない国があることを実感しました。教育を受けられない子達は教育を受けたいと強く思っている子が多いと思います。



私は学校に行くことがめんどくさいと感じることが多くありますが、教育を受けられる環境にいることに感謝しなければいけないと思いました。学校に行くたびにそのことを思い出したいと思います。

(報告者：河合 実卯)

## 支援先の村について② 水汲み体験！



海外ではよく蛇口の水道水は飲んではいけないと言われる。

インドは特に衛生的な水は飲めずまたトイレも手洗い場も汚れた場所が多い。僕たちはインドの家庭に水を運びました。



しかしその水の元は川でした。その川は決して綺麗とは言えず水をくんだ時この家族は大丈夫だろうか心配になりました。

インドに透明な水が空けばと心から思いました。また蛇口があればこの川から家までの距離もなくなりもっと楽な生活になると思いました。

組み方は頭にツボをのせ川から水を組み、また頭にツボをのせて運ぶ。頭にツボを載せるなんてバランスが悪く初めはうまく運べませんでした。

しかし慣れてくると頭にツボの底がピタッとはまりうまく運ぶ事ができました。運んできたツボは家庭に運び置きました。その水で食事からトイレからお風呂まで使うようでした。

(報告者：高柳 伊玖摩)



水くみ体験をしてみて私は水道のない生活が想像できなくて、実際体験してみてもやはりこれだけじゃ全てを理解することはできなかったと思う。でもこんなに少しの体験でもとても大変だった。

水は人間にとってとても大切なもので生きるためにはなくてはならないということを改めて実感した。日本には水はどこにでもある。

水道をひねるとすぐに水が出てくるし水道水をのんでも特に支障はない。お湯だったすぐに出てくる。そういうことが当たり前と思って生活してきたけど全然当たり前ではなくとても恵まれていることを改めて実感した。



飲みたいと思うときに水がなく、でも喉が渴いて仕方がなかったらどんなに汚い水でも飲んでしまうかもしれないと思った。

体験してみて何より水ってこんなに重たいんだということを改めて実感した。そして私は見てしまった。村の人がツボに半分以上水をいれるとそれを現地 NGO のビグラムがかなり減らしているところを。そんな水が少なくなったツボでも重たかったからいかに大変かがわかった。



頭にのせて運ぶのはバランスが悪くかなり大変で両手でしっかり押さえないとだめだし、手を上にあげているので腕がとてもしんどかった。

でも村の人のもっと水が入ったツボをバランスよくしかも片手で持っていたのが信じられなかった。私も真似して片手で持とうとしたら危うくツボを割るところだったのでおとなしく両手で運んだ。

川が家の近くでない村人もいると思う。こんなに重たいツボをもって長い距離を歩かないといけないと考えたら泣きそうになったし本当に大変だと思った。もし雨も降らず川の水がなくなってしまうらどうなるのかなと思ったらゾツとした。

水道を設置してあげたいと思ったしもっと運びやすい手段や自転車などの乗り物があったら、もう少し生活が楽になるかもしれないと思った。でもこういう生活が村に住むということの良さなのかもしれないと体験してみて思った。貴重な体験ができて本当によかった。

(報告：西岡 展葉)

## 支援先の村について③ 村人のお家訪問



今回のスタディーツアーでFTCJの支援先であるバリンド村(Bhilo Ki Barind)に住んでいる家族の家を訪問させていただきました。向こうの家は、日本の私たちが住んでいるような家とは少しかけ離れていました。玄関を入るとハエがたくさん飛んでいて少し悪臭もしました。

部屋の中には、電子家電、家具、寝具などの日本の家でよく見かけるものはなくコンクリートでできた床の上にマットが敷いてありレンガでできた釜があるだけでした。水道もないので少し離れた川まで水を汲みにいかなくてはいけませんでした。

その水汲みを私たちも体験したのですが一回でもきつかったのに現地の人たちはそれを一日五回もやると言っていて驚きました。また川の水には菌がいるので煮沸して菌を殺してから飲まなくてはいけませんでした。なので、現地の人たちは冷たい水を飲めないと言ってました。各家庭に五頭のヤギが支給されていて子ヤギやミルクを売ってお金にできるようになっていました。

訪問した時正直ここに住みたいとは思ってしまいました。また、日本に住んでいることにありがたみを感じました。

特に水に関しては、日本だと蛇口をひねれば簡単に安全な水が出てくるので川に水を汲みに行くという習慣がないので本当にありがたみを感じたし水をもっと大切に使おうと思いました。

さらに、生活に欠かせないものがなかったりして生活するのに不自由そうなのに現地の人には笑顔でいました。現地の人にもし自由な時間があつたらなにをしたいですかという質問をしたら休みたいと言っていました。彼女らは毎日水汲みや子供の世話で忙しく休む暇もないので少しでも楽ができるように近くに井戸のようなものを作って少しでも楽をさせてあげたいなと思いました。

今回のお宅訪問で改めて私たちの身近にあるものがどれだけ大切かがわかりました。こういう人たちのためにも何かできることがあれば幸いです。(報告者：杉田康輔)



インドに到着して3日目に無事、ウダイプールのWE Centerという、僕たちが滞在することになる宿舎に到着し、本格的なボランティア活動が始まりました。

僕たちが活動をした村へは、バスで片道30分程度かかりました。その村は、WE(Free The Children)が子供の教育支援や家族の生活支援などを行なっているコミュニティです。具体的には、学校の新校舎やトイレの建設等を行なっていました。このトイレの建設というのがキーポイントで、女子の登校率が大幅に上がったそうです。というのも、他の学校だと、男女分かれていないトイレだったり、不潔なトイレしかなく、女子の生徒はそれを嫌がり、登校拒否になるのだそうです。それを聞いて、なるほどな、と納得しました。日本ではそのようなことはあり得ませんが、もしそのように全く整備されていなかったら、学校に行きたくなくなる気持ちも本当によく理解できました。

さて、その学校からほど近い場所にある、お宅に訪問させていただくことができました。家は二階建てで、決してきれいとは言えないところでした。お母さんと子供達2人が出迎えてくれ、実際の生活環境を目の当たりにすることができました。実際のインドの農村で暮らす人たちの生活を自分の目で見たいと出発前から思っていたので、僕にとって本当にこれは嬉しい機会でした。二階に案内され、中に入りました。電気はもちろんなく、昼間でしたが薄暗かったです。広さも、僕たち一行が入ると満杯のような狭さでした。また、ハエが本当に多くいて、ここにずっと住んでいるというのは少し信じられないくらいでした。水道も通っていないので、毎日最低でも4、5回は水汲みに行っているという話でした。実際に自分もその水汲みを体験しましたが、4分の1くらいの水の量で一往復するのが精一杯で、どれだけのことを日々行なっているのか、痛感できました。

お宅訪問した際に、一番印象深かったのは、僕がお母さんに、もし何か帰れるとしたら、何を一番変えたいですか？何が一番変わって欲しいですか？と訪ねた時のことです。僕は、恥ずかしながら、もう少しいい場所に住みたい、とか、楽に暮らしたいという答えが返ってくるとばかり思っていました。しかし、お母さんはこう答えました。“今の生活で私は幸せだから、何も変えないでいい。ただ、子供達が教育を受け、仕事について、幸せになってもらいたい。できれば、将来一緒に住みたい。それくらいが願いです。とおっしゃっていて、感動しました。良いとはお世辞でも言えない環境下で、自分よりも先に自分の子供の幸せを願うお母さんの姿が本当に素晴らしくて、尊敬しました。それと同時に、子供が学校で教育を今のように受けられるように、今行なっている支援を、継続的に行うことが必要だなとも強く思いました。(報告者：梶原 拓朗)



私たちは村に住むフリー・ザ・チルドレン・ジャパンが支援しているひとつの家族の家を訪問しました。私はインド人がどのような生活をしているのか知りたかったので実際に村で暮らしている人の家を訪問することは興味深いものでした。その家族は二人の子供と母親と父親の四人家族と日本と変わらない家族構成でしたが、家は日本の一般的な家よりも小さかったです。家の中には椅子やテーブルなどの家具はなく、とてもシンプルな造りでした。私は家の中に家具がないことに驚きました。



私たちにとって家とはリラックスでき、日々の疲れを取る場所として認識されていますが、その家族には何も置いてなくて、座る時もマットを敷いた上に座るといって感覚が強かったのでリラックスできているのか疑問に思いました。私はそんなインドの家を見て、自分たちがどれだけ恵まれているのかということに改めて気付かされました。私はテーブルやソファ、テレビなどの家具が家にあることがあたりまえだと思っていた部分がありましたが、それは私たちが恵まれていたからそのような考えをもつことができているのだと感じました。

私たちはこのように疑問に思ったことを子どもの母親に聞くことができ、様々な質問をしました。

質問をしたところ、母親は20歳で妊娠し、子どもを産んだと言いました。インドでは結婚する年齢や妊娠する年齢が他の国よりも若いということは聞いていました。20歳で妊娠することは日本でもありますが、中でも若い方だと思いました。若い歳から子どもを産む理由として子どもを働かせて親の負担を減らすためだということを知りました。それは児童労働にもつながってくるので私はそれを聞いて、少しでも児童労働が減るような活動に参加したいと強く思いました。そして、同じ女性として、若いうちから子どもを産む女性が減ってほしいと思いました。(報告者：河合 実卯)

## 支援先の村について④ ボランティアワークで学校のキッチンの土台建設！



お宅訪問をしたバリンド村で学校のキッチンの土台工事のボランティアもしてきました。もともと今回のスタディーツアーに参加した理由もこのボランティアがしたくて参加したということもありすごく楽しみでした。

まず、少し離れた場所からバケツリレーみたいな感じでみんな一列に並びレンガを運びました。そのあとに砂をまた離れた場所から運びその砂とセメントと水をシャベルなどで混ぜ合わせてコンクリートを作りました。このレンガや砂が重くて運ぶのが大変でした。



最後にその作ったコンクリートをノリ代わりにして土台となるレンガを白い糸に合わせて置いていき積み重ねていく作業をしました。レンガを糸に合わせて置いていく際にずれないように置くのに神経を使って少し最初のほうはてこずってしまいました。もし数ミリでもレンガがずれてしまえば崩れてしまうので慎重に置いていきました。



今回この作業を一時間ぐらいしかお手伝いできなくて土台の一段目も終わらすことができなくて少し残念でしたが、ほんのちょっとでも向こうの人たちの役に立ててとてもうれしかったです。あと二日ぐらい手伝いたかったです。



私が大学に行ってやりたいことが建築関係だったので貴重な体験にもなりました。なので、大学に受かって建築のことを学べたら今回のこのボランティアの経験を活かせるらいいなと思いました。インドにまた行ってバリンド村に訪問して完成したキッチンを見てみたいです。ほんの少しだけでもキッチン建設に携わった一員として完成を楽しみにしたいです。(報告者：杉田 康輔)

今回は、学校の給食室建設のボランティアをした。煉瓦で建物を作るための、いくつかの作業であった。

まずは、斜面の下から煉瓦を運ぶ作業である。参加者が1列に並んでバケツリレーの要領でお互い声を掛け合いながら、煉瓦を1つずつ隣へ送っていった。わたしは隣の人の距離感を確認するために、最初に隣の人に手を叩いてもらってから煉瓦を送った。

次はセメントを混ぜるために使う土をシャベルで大きなボールに入れて、そのボールを運ぶ作業である。これもわたしは両手でボールを持ち、誘導してもらいながら斜面を登った。そして、水と土とセメントを混ぜる作業では、地面に土とセメントを混ぜたものを高く積んで一番上を窪ませ、そこに水を入れて周りから土やセメントを混ぜていった。この作業はわたしはしなかったが、少しでいいからしてみたかった。



最後に、ロープに沿って並べた煉瓦の間にスコップを使って混ぜたセメントを流し、間を埋める作業をした。この時セメントは水と混ぜてドロドロしたものかと思っていたが、ザラザラした土の感触もよく残っていた。わたしはスコップだけでは隙間にセメントがうまく入ったかどうか分からないので、手袋をした手で触って確認しながら作業をした。作業を進めていく中で、隙間が埋まっていくことが触っても確認できた。

混ぜたセメントを煉瓦の間に流していく作業は初めてで、日本ではなかなか経験できないものであると思う。ただ、煉瓦や土を運んだりセメントを混ぜるなど、決して楽ではない作業が多かった。わたしたちは何人かで交代しながら、全員で数10分の作業であった。しかし、現地の人たちはこれを毎日何時間も、しかも機械を使わず全て手作業でしていると思うと、大変な重労働であろうと感じる。

ただ、学校にこのような給食室ができて食事が提供されることで、就学率も向上するのではないかと考える。毎日昼食の弁当を作らずに済むというのは、家族にとって大きな負担の軽減になるだろう。この給食室が1日も早く作られ、児童・生徒たちに安全な給食が提供される日が来ることを願っている。

今回のボランティアの経験や現時点で給食室がないこの学校の現状は、日本では想像しにくいものである。今回体験したことをわたしの周りに伝えていくことで、周りの人に外国の現状について知ってもらえればと感じた。(報告者：梅村 光)





Meのセンターでインドや自分たちをテーマにしたアクティビティーを行った。この中では、2つの解決する必要がある問題を提示され、一方を選んでその理由を話し合うというものだ。

自分はこのアクティビティーの中で自分の意見を人に示すというところが大事な部分だなと感じた。なぜならば、人にはそれぞれ意見があり対立することもあれば同じ意見になる場合もあるからだ。

そして、このアクティビティーの中で小中学生の時に健康について学習するか、大人になった女性が自分やおなかの子供の健康について学習するかの二択だった。

自分は、小中学生の時に健康について学ぶのを選んだ。なぜなら、小さい時に学ぶことで男女共に健康面に注意を払うことができるようになると思ったからだ。女性が学ぶときには、すでに子を身ごもっていたりしてすでに遅い時もあるからだ。

このように自分は考えていたが、女性の健康については「おとなにならなければ、わからないこともあったりするから」などの意見が出ていた。そして、考えをもう一度まとめ、どちらの問題が先に解決しなければいけないかを考えて選択した。このような2択の問題を1つに選ばなければいけないとき、必ず一方を犠牲にしなければいけないことをこのアクティビティーの中で知ることができた。

毎晩、自分たちはチームの中でその日の良かった部分や挑戦した部分と悲しかったことを一人一人自分の思ったことを発言しあった。

この時、自分たちは英語を使って現地のスタッフとともに行った。自分はあまり、英語ができるわけではないが一生懸命に単語を探して、話をした。この発言しあう中で、自分の気付くことができなかった部分や共感する部分を共有することができた。

自分はこの中で、話し合いはとても重要であるということを確認することができた。自分はあまり学校での学習でもあまり発言ができていなかったのですが、このアクティビティーを通してこれが



らは発言することをプラスに考えて授業や日常生活に取り組んでみようという気持ちになることができた。(報告者：柴田 蔵人)



今回は、次の4つのワークショップをした。

1. 全員で椅子に座って(ラジャスタン州に行くバスに乗って)、左右に見えてくるチェックポイントで質問に答えていく。
2. 全員でエベレストに登りながら、長いロープの途中の結び目の部分を握り、それを片手だけでほどいていく。ワークショップ中は各自が結び目の所から手を離してはいけない。もし、手を離したら、その時点で列から抜ける。
3. 初めに全員で大きな円を作り、隣でない人と手を繋いで、その手を離さずに絡まった状態をほどいていく。
4. 全員が向かい合って2列に並び、"River!"の指示で1歩前にジャンプする。"Bank!"の指示で1歩後ろにジャンプする。ただし、同じ指示が2回以上連続してあった場合は、2回目以降はその場を動かない。もし、間違った動きをしたら、その時点で列から抜ける。



このワークショップの中で、わたしが最も印象に残っているのはバスのワークショップである。

各チェックポイントでの質問は、次のものであった。

1. コーヒーショップとティーショップのどちらに行きたいか。
2. 時間を過ごす時、家族と友達のどちらと過ごしたいか。
3. 手が4本と足が4本、どちらがほしいか。それはなぜか。
4. ホームレスと飢え、どちらに興味があるか。それはなぜか。また、どうすれば、自分が選んだ問題を改善できると思うか。
5. 小学校の教育、女性の健康や医療のどちらに興味があるか。それはなぜか。

全部の質問が終わってから全員で円陣を組んで、

- ・なぜこのワークショップをしたか。
  - ・2つのうちから1つを選ぶ時、どんな理由でそれを決めたか。
  - ・日本にも関わる問題もあるが、これらの問題を今後どうしていけばよいと思うか。
- について意見交換した。

このワークショップを通して、意見交換や自分と違う意見を受け入れる大切さを学んだ。日本ではこのような社会の問題を考える機会は少ないと思う。

4つ目の質問でわたしは「飢え」を選んだ。ツアー2日目にジャイプールのマクドナルドの前で、食べ物を求めている家族に会い、状況を目の当たりにしたからである。日本ではこのような状況は想像が付き、わたしも今まで話で聞くだけで実感が湧かなかった。今回実際の様子を見たことが、「飢え」を選ぶ決め手となった。他にも、最後の全員での意見交換で、わたしはこのワークショップをした理由として、「他の意見に気付くため」と言った。わたし自身自分の考えを押し通そうとして、他の意見をあまり聞かないところがある。しかし、今回は他の意見もみんな理解できるものばかりで、たくさんの方が自分の意見を交換し合うことの大切さに改めて気付いた。

また、このバスのワークショップでもあったし、毎晩その日感じたことの意見交換でもあったが、よいことだけでなくマイナスのことも共有することの大切さを学んだ。わたしは夜のシェアでマイナスのこととして、「タージマホールはとても蒸し暑かった」、「コミュニティーの学校で、古い教室は狭く机や椅子がなかった」と言った。わたしたちは自分に取って都合のよいことは共有したいが、都合の悪いことはあまり共有したくないものである。ただ、どちらもシェアすることで、相手の考えをより分けることが出来ると感じた。

今回のワークショップは日本でも十分活用できるものであると感じた。このワークショップを通して、今自分がどんなことに興味があるかや、自分と違った意見も含めて他人の考えに気付くことができた。今後機会があれば、このワークショップの内容をわたしの周りにも広めていきたい。(報告者：梅村 光)



現地のスタッフやツアーガイドの方に文化について、教えていただいた。

まず、カーストについて説明を受けた。カーストは基本4つに分かれている。1947年までは、バラモン(Brahmins)、クシャトリア(Kshatriya)、ヴァイシャ(Vaishya)、シャードラ(Shudra)だ。その他にも2つの種類の人々がいる。社会に無視をされてしまう人々(Untouchables)と部族として都市にいない人々(Tribals)のような人々もいる。

カースト制度は、廃止された。しかし、今でもその名残は残っていて、大きく分けて3つに分かれている。一般的な人々、OBC、ST/SCだ。

一般的な人々は、バラモンとクシャトリアだった人々だ。OBCとは、その他後進階級のことである。基本のカーストの一部の人達が認定されていて優遇措置を受けることができる。

ST/SCとは指定カースト(SC)、指定部族(ST)のことである。基本のカーストに入っていない2つの人々を調査するときに1947年までのように振り分けているとカースト調査として他国にみられてしまうために廃止してインドはST/SCのように国から認定することでカーストをなくした。

また、インドにはカースト制度が浸透したため、廃止された今でもその名残がとて残っているようだ。そのため、恋愛結婚も増え始めているがとて少なく、いまだにお見合い結婚が主流になってしまっている。

宗教面では、80%をヒन्दュー教が占めているが、イスラム教やキリスト教などたくさんの宗教がインドにはある。その中でも、おでこに赤い点を付けるのはヒन्दュー教の人々がつけていた。言語でも、お札を見ると15の言語が書かれていた。共通言語はヒンディー語だが、ほとんどの人が英語をしゃべることができる。また、地域に住んでいる多くの人が川からとった水を飲んでる。このように、いろいろな日本と違った面をたくさん持っている。



食事面では、日本でも知られているがカレーがあり、スパイスが効いていてとてもおいしいものだった。また、小麦粉などからパンのようなものを作ったりしたりいろいろな工夫が料理でこなされていた。そして、インドでは混ぜたものごとをサモサというので、自分たちもサモサを作り食べることができた。(報告者: 柴田 蔵人)



皆さんは「インド」と聞くと、まずカレーを思い出すのではないのでしょうか。今回のスタディーツアーでは、初日の夕飯から早速カレーが登場しました。



そこでは多様な種類のカレーが出され、その中でもチキンカレーは味が日本のカレーと若干似ていて、辛くもなく食べやすかったので私のお気に入りです。インドのカレーは北と南では大きく異なり、北はドロツとしていて、南はシャバシャバしています。今回はインドの北の方を中心に移動したので、ドロツとしたカレーが自分の味覚に合っていてとても美味しかったです。

カレーを食べる際には、米の他にナンにカレーをつけて食べました。本場のナンは、日本で食べるナンよりもモチモチしていてとても美味しかったです。

インドの料理は、皆さんが知っているカレーとナンだけではありません。

私はインドに行って、チャイという飲み物が大好きになりました。Free The Childrenが支援するコミュニティーエリアで、シェフの方がチャイをその場で作ってくれました。

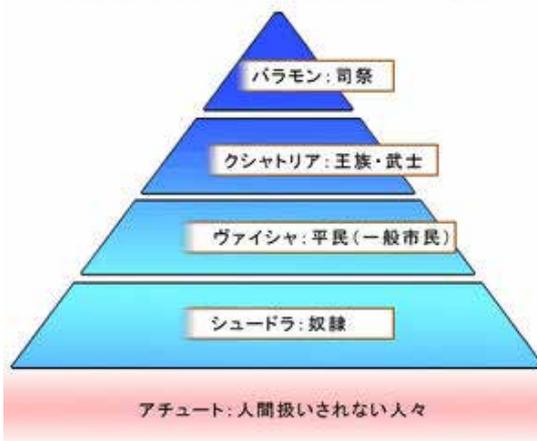
チャイは、大まかに説明すると生姜が入ったミルクティーのようなものです。作り方としては、ミルクに香辛料や種などを入れて混ぜて、汁だけを絞って、それを飲む感じなんです。チャイを初めて飲んだ時は生姜が多く入っていたのでとても辛かったです。あまりにも辛かったので、ミルクを多めに足すと程よい味になりました。スタディーツアーの参加者の中には、砂糖を入れて飲んでた人もいました。もしまたチャイを飲む機会があったら、私も砂糖を入れて飲んでみたいと思います。

次に、私が興味深いと思ったインドの文化をご紹介します。皆さんはインドの、「カースト制」というのをご存知でしょうか？

カースト制というのは、紀元前1500年にアーリア人によって作られた身分制度のことです。このカースト制は既に廃止されていますが、多くの地域では未だに残っていて、貧富の差が大きいんです。カースト制は4層のピラミッドで構成されていて、上からバラモン(司祭者)、クシャトリア(王・武士)、ヴァイシャ(農工商)、そしてシュードラ(隷属民)です。カースト制度というのは、親子代々受け継ぐものなので、個人で身分を変えることはできず、親と同じ仕事につき、結婚も同じ身分の人と行います。

私はこのスタディーツアーに参加するまで、カースト制というものを知りませんでした。人口が多く、たくさんのエンジニアなどを生み出しているインドで、なぜ貧富の差がとて大きいのか、疑問でした。私はこの「カースト制」というのが、インドの貧富の差を拡大しているのだろう、と思いました。(報告者: 菌部 夢有人)

## インドのカースト制度における階級



# 今、あなたにできること！

寄付で  
終わりに  
したくない！

## 交流・文通しよう！

せっかく寄付をするなら、支援先の子どもと交流しませんか？「支援者と被支援者」の関係をかえて、フィリピンとインドの子どもたちと「ともだち」になりませんか？手紙をお互いに交換して、友達になって、理解を深めていきましょう♪

**参加費 12,000 円（年間）**

## キッズパワーサポーターになる

ご指定の銀行口座・郵便口座から  
定額のご寄付を自動引き落としできる募金制度です。

ご寄付は国内外の子ども支援に充当します。

ご寄付は月々 500 円から  
学生の方は年 3,000 円から  
ご寄付いただけます。

## 世界の子どもに寄付をする！

●**インド**● 学校建設、井戸設置、医療ケア、  
村人の収入向上などの活動を行なっています。

●**フィリピン**● 貧しさのために体を売らなければ生きてい  
けない子どもや少数民族の子どもが、勉強をしたり栄養ある  
ご飯が食べられるよう支援しています。

その他にも、ケニア、シエラレオネ、タンザニア、  
ハイチ、エクアドル、ニカラグア、  
中国農村地域を支援しています。

## フェアトレードでショッピング！

FTCJ の支援先であるフィリピンやケニアで  
作られた商品を販売して、その利益を現地の子ども  
支援に還元します。お買い物で国際協力ができるんで  
す。ぜひ、お買い求めください。

**FTCJ ショップ** → <http://ftcj.ocnk.net/>

- **ジュースバック** 450 ~ 1,800 円
- **無添加フェアトレード・ドライマンゴー** 500 円 など。

## ご寄付・募金先について

※指定事業への寄付の場合はお知らせください。

世界中の貧困から子どもを解放することができるように、そして日本の子どもたちの力を  
育てることができるように、当団体へのご寄付のご協力をお願いいたします。

### ◆銀行振込

銀行名：三菱東京 UFJ 銀行 上野支店  
普通 5360502  
口座名：トクヒ）フリーザチルドレン

### ◆郵便振替

郵便口座：00120-5-161532  
口座名称：フリー・ザ・チルドレン  
・ジャパン

### ◆クレジットカード

VISA・MasterCard のカードが  
ご利用いただけます。  
※手続きは WEB サイトからお願いいたします。

## Free The Children Japan

### インドスタディーツアー 2017 夏報告書

- 発行元：認定 NPO 法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
- 発行：2017 年 9 月

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6-6-3F

03-6321-8948 03-6323-6504 info@ftcj.com <http://www.ftcj.com>



「世界は変えられる」子どもがそう信じられる社会に